

チベット訳『楞伽師資記』の新出断片について

西 岡 祖 秀

I 序 『楞伽師資記』（以下『師資記』と略記）はいうまでもなく楞伽宗の伝法系譜を述べた敦煌漢文禅籍である。先年、上山大峻氏はそのチベット訳を敦煌チベット語文献のスタイン蒐集本（以下 S. と略記）中に発見し、『師資記』成立の問題点についても言及された¹⁾。最近筆者は、上山氏の指摘による S. 710 (II) と訳語法を異にする別本のチベット訳『資師記』の断片を S. 704 中に発見したので、以下にテキストと和訳を掲げて新出断片の輪廓を紹介し、漢文写本との異同、チベット訳 2 写本の比較を通じてその資料的意義について検討してみたい。

II S. 704 本文献は 21×9cm の折本形用紙 13 枚の表裏に dbu can 体で 5 行詰めに書かれた写本である²⁾。写本自体に丁数の記載はなく、India Office Library によって 19~31 の整理番号が打たれている。従来の研究では、上記の整理番号に従って表裏それぞれが連続した別個の禅文献であるとされていた³⁾。しかし文章の接続・内容を検討した結果、本文献は (1) fol. 19, (2) fols. 20-21, (3) fols. 22-31⁴⁾ の 3 部分に分たれ、第 2 部分の裏文献⁵⁾（即ち fol. 21b-fol. 20b）が『師資記』のチベット訳であり、第 5 道信禅師の章の前半部分（大正 85 卷, 1287a, II. 11-20）に相当する断簡であることが判明した。

III 藏漢テキストと和訳

〔藏文テキスト〕 (fol. 21b, l. 1) mdo sde las kyañ ji hañ myi dran ba ni sañs rgyas dran ba shes byaḥo⁶⁾ // ci hañ dran ba myed pa shes bya ba ni / sañs rgyas (l. 2) rgyas [sic] dran baḥi sems de ñid sañs rgyas yin no // myi bden ba dran ba ni ma rabs yin no // sems las gud na (l. 3) sañs rgyas çes bya ba gshan myed // sañs rgyas las gud na sems çes bya ba gshan myed de // sañs rgyas dran (l. 4) ba ñid sems dran ba yin no // sems tshol ba ñid sañs rgyas tshol ba yin no // de ciḥi phyir she na // sems dañ (l. 5) rnam par çes pa la dbyibs myed // sañs rgyas la yañ mtshan ma ḥam gzugs myed paḥi phyir ro // tshul (fol. 20b, l. 1) ḥdi ltar çes pa ñid ni / sems bde baḥo // rtag tu sañs rgyas dran shiñ dmyigs pa myi ḥbyuñ na / phyañer (l. 2) mtshan ma myed pa la mñam sñoms te myi dmyigs so // gnas ḥdir chud na dran baḥi

sems shiḥo // yañ brnan (l. 3) myi dgos te ḥdi ñid la bltas la sems sñoms na
 de bshin gcegs paḥi yañ dag paḥi chos ñid kyi sku ñid (l. 4) yin no // ma
 nor pa yañ dag pa ñid ces kyañ bya / sañs rgyas kyi rañ bshin shes kyañ
 bya / chos rnams kyi yañ dag (l. 5) pa ñid ces kyañ byaḥo // mya ñan las
 ḥdas pa shes kyañ byaḥo // rnam grañs ni tshad myed mod kyi // ḥoñ kyañ
 [漢文テキスト]⁷⁾ [大品] 經⁸⁾云、無所念者、是念仏。何等名無所念、即念仏心
 名無所念。離心無別有仏、離仏無別有心。念仏即是念心、求^①心即是求仏。所以
 者何、識無^②形、^③仏無相貌。若也知此道理、即是^④安心、常憶念仏、攀縁不起、
 則泯然無相、平等不二。^⑤入此位中、憶仏心謝、更不須^⑥徴。即看此等心、即是如
 來真實法性之身。^⑦亦名正法、亦名仏性、亦名諸法実性実^⑧際、亦名浄土、亦名
 菩提金剛三昧本覺等、亦名涅槃界般若等。名雖無量

①[心即是求]—㉔ ②形=刑㉔ ③(仏無刑)+仏㉔ ④[安]—㉔ ⑤(不)+入㉔ ⑥徴
 =徴㉔ ⑦[亦名正法]—㉔ ⑧際+(法)㉔

〔チベット文和訳〕『[大品] 經』にも「何も念じないことが仏を念ずることであ
 る」と云われる。何も念ずることがないと云うのは、仏を念ずる心そのものが仏
 である。真實でないことを念ずるのは下等人である。心と別に仏と云われるほか
 のものは無く、仏と別に心と云われるほかのものは無い。即ち仏を念ずるそのこ
 とが、心を念ずることである。それはどうしてかと云えば、心と識には形が無く、
 仏にも特相や姿が無いからである。この道理のままに知ることそのことが安心で
 ある。常に仏を念じて対象に対する心が生じないならば、全く無相の状態に等し
 く対象にとらわれないのである。この境地に入れば〔仏を〕念ずる心は鎮まるの
 である。更に〔仏を〕指し示す必要はなく、まさにこれを見て心が平等ならば、
 如來の真實なる法身そのものである。〔それは〕正しい真實性ともよばれ、仏の
 自性ともよばれ、諸法の実性ともよばれるのである。涅槃ともよばれるのである。
 異称は量り知れないが、しかし

IV 漢文写本との異同 以上の如く、本チベット訳は漢文写本をほぼ忠実に直
 訳したものであると云えよう。しかし、以下に指摘する箇所には語句の異同が認め
 られる。即ち漢文テキストの下線部分「即念仏心^〇名^〇無^〇所^〇念^〇」は、チベット訳では
 「仏を念ずる心そのものが仏である。真實でないこと (myi bden ba) を念ずるのは
 下等人 (ma rabs) である」となっており対応しない。ところで上記訳文中の「myi
 bden ba」「ma rabs」はそれぞれ「妄」「凡夫」の対応チベット訳語である例が、
 偽經の『法王經』⁹⁾『仏説天地八陽神呪經』¹⁰⁾のチベット訳敦煌写本中に確認され

ることから、本訳のもととなった原文として「^〇即念^〇仏心^〇是^〇仏^〇、^〇妄念^〇是^〇凡^〇夫^〇」¹¹⁾を想定しうるであろう。なお別本のチベット訳写本では、当該箇所は「仏を念ずることであり、[それを]何も念ずることがないと名づける」(S. 710 (II), fol. 52b¹⁻²)¹²⁾とあり、現存漢文写本の内容とほぼ一致したものとなっている。また漢文テキストに点線を施した箇所がチベット訳には欠落している。以上のことから、本チベット訳の翻訳原本となった漢文写本は、浄覚の編纂による現行の『師資記』とも、また別本のチベット訳写本 S. 710 (II) の原本となった漢文写本とも異なるものであったと考えられる。

V 訳語法 次に本チベット訳断片 (S. 704) と、既に上山氏によって紹介された別本チベット訳写本 (S. 710 (II)) とを訳語法の点から比較してみたい。S. 710 (II) は漢文テキストの序に当る部分がなく、本文標題より始まり第5道信禪師の章の途中「……識無形、仏無相貌」(大正 85 卷, 1287a, l. 14) で終わっている¹³⁾。これに対し S. 704 は既に示したように、同じ道信禪師の章の「経云、無所念者……名雖無量」(大正 85 卷, 1287a, ll. 11-20) に相当する断簡であるから、両本は漢文テキストの「経云、無所念者……仏無相貌」(大正 85 卷, 1287a, ll. 11-14) の部分に関して直接にその対応訳語を比較しうるわけである¹⁴⁾。その訳語例を対照表によって示せば下記の通りである。なお S. 704 の項には「仏無相貌」以下に対する訳語例も挙げ、その対応訳語を S. 710 (II) の他の箇所にも求めうる場合には括弧内に該当箇所を記して示した。表中、*印を付したものは想定漢語である。

	S. 704	S. 710 (II)
経	mdo sde	chos kyi yi ge
名……	……shes byaḥo	deḥi myiñ……ḥes byaḥo
*妄 念	myi bden ba dran ba	myi bden ba bsams ba (35b ²)
*凡 夫	ma rabs	myi phal tha mar pa (16b ²)
念 仏	sañs rgyas dran ba	sañs rgyas bsam baḥ
所以者何	de ciḥi phyir she na	ji lta shes byas na
識 無 形	sems dañ rnam par ḥes pa la dbyibs myed	sems gyi rnam par ḥes pa la gzugs myed
相 貌	mtshan ma ḥam gzugs	byad gzugs
安 心	sems bde ba	同 左 (19b ¹ 他)

攀 縁	dmigs pa	yan lag (gyi sems) (52a ²)
泯 然	phyañer (/phyañ ñer)	——
如 来	de bshin gcegs pa	yañ dag par gcegs pa (24b ⁴)
仏 性	sañs rgyas kyi rañ bshin	sañs rgyas gyi ño bo ñid (34b ¹ 他)
諸法実性	chos rnams kyi yañ dag pa ñid	——
涅槃	mya ñan las ñdas pa	同 左 (21a ²⁻³)

上に挙げた両写本の訳語例を、『翻訳名義大集』（814年編纂）中に示された「決定訳語」を基準とし、それ以外のものを一応「旧訳語」と看做して検討すれば、次の諸点を指摘しうる。

- (1) 「仏」、「涅槃」に対する訳語は両写本ともに「決定訳語」に一致する。
- (2) 「経」、「攀縁」、「如来」に関しては S. 704 は「決定訳語」に一致し、S. 710 (II) は「旧訳語」を用いる。
- (3) 「妄念」、「凡夫」については両写本ともに「旧訳語」を用いるが、その訳語にも新旧の相違が見られる。

上記 (2) の点から、S. 704 は 814 年以降に翻訳された「新訳」、S. 710 (II) は 814 年以前の「旧訳」と考えられる。「旧訳」の S. 710 (II) 中に (1) に示した「仏」「涅槃」の「決定訳語」が見られる点については、上山氏の指摘にもある通り¹⁵⁾、これらの極めて基本的な術語は仏教導入の初期にその意味内容から訳語が決っており、それが旧訳法でも用いられ更に「決定訳語」として採用されたという事情によるものと考えられる。また「新訳」の S. 704 中に (3) に示したような「旧訳語」が使用されている点については、吐蕃本土において梵語からの訳語統一を意図して編纂された『翻訳名義大集』の規定が、十分に浸透し得なかった時期の敦煌において、その翻訳がなされた可能性を示唆するものと思われる。

VI 入道安心要方便法門 本チベット訳断片が『師資記』の第5道信禅師の章の前半部分に対するチベット訳であることは、既に述べたとおりである。この『師資記』全体の約5分の2を占める第5道信章は、章の冒頭に道信の著作として示されている『入道安心要方便法門』（以下『方便法門』と略記）そのものであろうというのが諸学者のほぼ一致した見解である¹⁶⁾。ところで本チベット訳断片の翻訳原本となった漢文写本は、本論の IV に述べた如く、現行の浄觉集の『師資記』とも、また別本チベット訳写本の原本となった漢文写本¹⁷⁾とも異ったもので

あったことから、その翻訳原本として『方便法門』を想定することも出来よう¹⁸⁾。即ち本チベット訳断片は、『師資記』第5道信章の訳ではなく、そこに引用される『方便法門』そのものの翻訳である可能性も考えられるのである。もしそうであるとすれば、本チベット訳断片中に見られた字句の出入および脱落は、『方便法門』の原形を反映したものであり、その相違箇所こそ後の浄覚による改変・増補と考えることが出来よう。

VII 引用関係と翻訳年代 本チベット訳断片の一節が、P. 116 中に書写されるチベット撰述禪文献『無所得一法論』*dMigs su myed pa tshul gcig paḥi gshun* に引用されている。即ち8禅師の語録を集めた箇所に、降魔藏禅師 *bsam gtan gyi mkhan po bDud ḥdul gyi sñiṅ po* の教説として挙げられている文章 (fol. 166, l. 2-fol. 167, l. 1) が、本チベット訳断片中の2箇所の訳文とほぼ完全に一致する¹⁹⁾。漢文原本の「無所念者、是念仏」と「常憶念仏、……即是如来真実法性之身」に相当する箇所である。以上のことから、従来不明であったこの降魔藏の語の対応漢文資料は『師資記』あるいは『方便法門』であることが判明した。

次に本チベット訳断片の翻訳年代について云えば、既に述べたように訳語法から814年以降と考えられ、また本断片を引用する『無所得一法論』の成立が824年をさほど遡らない時期から841年迄と推定されている²⁰⁾ことから、その翻訳年代は814年から841年の間ということになる。

VIII 結語 以上に紹介した S. 704 中の断片は、『師資記』および『方便法門』両者のチベット訳である可能性を残しつつも、現在のところそのいずれとも俄には決定しがたい。しかし前者であるとすれば、チベット訳『師資記』に旧訳と新訳の二訳が確認されたことになり、敦煌における同書の流布をより一層明確に示すことになる。また後者であるとすれば、現在のところ『師資記』の第5道信章に依ってのみ知られる『方便法門』が単独で用いられていた可能性を示し、その原本が敦煌漢文禅籍中に存在することが予想される。なお本断片は甚だ不完全な写本である S. 704 の一部に過ぎず、禅文献と見られる他の部分との関連性を含め、S. 704 の全体像の解明は今後の研究課題としたい。

1) 上山大峻 (a) 「チベット訳『楞伽師資記』について」『仏教文献の研究』京都、昭和43年、pp. 191-209; (b) 「チベット訳からみた『楞伽師資記』成立の問題点」『印度学仏教学研究』第21巻第2号、昭和48年、pp. 90-95 参照。

2) Louis de la Vallée Poussin: *Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-huang in the India Office Library*, London, 1962, p. 226 参照。

3) 木村隆徳「敦煌チベット語禅文献目録初稿」『東京大学文学部文化交流研究施設研

究紀要』第4号, 昭和56年, p. 122 参照。

- 4) この部分に関しても India office Library の整理番号のままでは内容は通じない。正しくは 31b-30b-29b-28b-27b-26b-25b-24b-22a-23a とすべきで、これに数葉を隔てて P. 829 recto が接続するものと思われる。この一連の文献は「無分別の禪定に入ることにについて、正法の経に説かれることなどは、どの經典に求められ、いかなる意味であるかを略説したもの」(P. 829, recto, fol. 1a⁵-fol. 2a¹)である。なお S. 704 と P. 829 が本来同一の文献であることは、既に沖本克己氏が両写本の形状等から指摘するところである(『敦煌出土西藏文禪宗文献の研究(1)』『印度学仏教学研究』第26巻第1号, 昭和52年, p. 458, n. 20 参照)。
- 5) 木村氏は裏文献の位置を誤認しているようであり、同氏の表記をもってこの箇所を示せば fol. 29b-fol. 30b となるようである。木村前掲書, p. 122 参照。
- 6) 『二万五千頌般若』からの引用である(註(8)参照)。同経の敦煌出土本として S. 95 があるが当該箇所欠落のため対照できなかった。なお下記の北京版西藏大藏經入藏本の訳とは異なる。dran pa med cin yid la bya ba med pa ni / sañs rgyas rjes su dran paḥo // (P. No. 731, Vol. 19, 120-3-3)。
- 7) 柳田校訂本(柳田聖山『初期の禪史 I』東京, 昭和46年, p. 192)を使用した。原テキストは7種が知られているが、この箇所を有するのは S. 2054 と P. 3436 の二本であり、それぞれ㊸、㊹の略号により語句の出入を下に注記した。
- 8) 出典箇所は柳田前掲書(p. 196 参照)によれば、『摩訶般若波羅蜜多經』巻23、三次品の「無所念、是為念仏」(大正8巻, 385 c⁵⁻⁶)である。
- 9) 沖本克己「禪宗史に於ける偽經—『法王經』について—」『禪文化研究所紀要』第10号, 昭和53年, p. 37 参照。
- 10) 拙稿「チベット訳『仏説天地八陽神呪經』の敦煌写本」『印度学仏教学研究』第30巻第1号, 昭和56年, pp. 471-466; S. 458 (fol. 22b²), S. 459 (fol. 80b 10-1, l. 5), S. 460 (fol. 93a-1, l. 3), S. 463 (fol. 88b-2, l. 3), P. 729 (fol. 1a²) 等参照。
- 11) これと同じ句が第5道信章の冒頭部(大正85巻, 1286c²³⁻²⁴)に見える。
- 12) 原文を挙げれば下記の通りである(沖本克己『『楞伽師資記』の研究—蔵漢テキストの校訂および蔵文和訳(2), 『禪文化研究所紀要』第11号, 昭和54年, p. 12 参照)。
sañs rgyas bsam baḥ yind te // mying ji yang bsam baḥ myed /
- 13) 上山前掲書(a), p. 192 参照。
- 14) S. 710 (II) の fol. 52a⁴-fol. 53a² がこの箇所に対応する。
- 15) 上山大峻「チベット訳『頓悟真宗要決』の研究」『禪文化研究所紀要』第8号, 昭和51年, p. 62 参照。
- 16) 柳田聖山『初期禪宗史書の研究』京都, 昭和42年, p. 64; p. 72, n. 19 参照。
- 17) 上山氏はこれを古本の『師資記』であるとし、淨覺はこれに増広・改変を加えて広本の『師資記』を編纂したとする。上山前掲書(b), p. 91 参照。
- 18) 沖本克己氏の御教示による。
- 19) 「微」の対応チベット訳語である「brnan」(S. 704, fol. 20b²)を、P. 116 では「brtan」(fol. 166, l. 4)と誤写するほかは全く同文である。
- 20) 木村前掲書 p. 98 参照。

(東京大学助手)